

思想を善導する環境設計

細野雲外「不滅の墳墓」を読む

土居浩

Environmental Design for Proper Guidance of Thought : Reading Ungai Hosono's *Funetsu no Funbo*

DOI Hiroshi

はじめに

- ① 設計の前提としての社会認識
- ② 環境浄化のための設計
むすびにかえて

【論文要旨】

〈身体と人格〉の視座から細野雲外「不滅の墳墓」(一九三二年刊)を読み直すと、その題目にもかわからず、死者よりもむしろ生者の〈身体と人格〉を対象とする著作であることが判明する。各地の全住民を一墳墓へ合葬する特異な「不滅の墳墓」構想が、同時代的に荒廃の進む墳墓への悲嘆を契機としていることは、これまでも指摘されてきた。たしかに引用された大量の新聞記事が示すように、「不滅の墳墓」では荒廃する墳墓が問題視されている。しかし雲外は「不滅の墳墓」を、姉妹編「思想悪化の因」(一九三〇年刊)・「斯君斯民」(一九三一年刊)を含めた「思想善導研究の三部作」として出版しており、同時代的には「思想善導」の流れにあるものである。

一部の学生や青年団のみならず、国民思想がいかに相互に悪化しているか、その現実が三部作一作目の「思想悪化の因」で示される。主に新聞記事から蒐集した大量の「事実資料」に基づく論述は、三部作に共通する姿勢である。この「思想悪化の因」を承けた二作目・三作目は、雲外自身が「思想善化の因」前・後編として位置付けている。

二作目の「斯君斯民」では、善導教化のため模範とすべき「光明の方面」について「事実資料」が列挙され、いかにすれば効果的に「説法」が可能となるかについて論じられる。この「善」「悪」両方ある「社会環境」を踏まえ、より「善」へと善導教化すべく構想された具体的施策を示すのが、三作目の「不滅の墳墓」である。民衆を「思想善導」するために、より効果的な「説法」の舞台として設計されたのが「不滅の墳墓」構想であり、その意味で「不滅の墳墓」は、死者よりもむしろ生者の〈身体と人格〉を対象としている。

「不滅の墳墓」の具体的像は、「不滅の墳墓」の巻頭に絵画と図面として掲げられている。このうち絵画を担当したのは、売れっ子の挿絵画家・伊藤彦造である。当時「憂国の絵師」として自己主張しつつあった彦造は、まさに適役だったといえるだろう。

【キーワード】合葬(共同) 墓地、昭和初期、環境設計、思想善導、伊藤彦造